

地域おこし協力隊広報誌

『協力隊ライフ』

ー2025 年度 年間活動報告ー

安芸高田市で活動する地域おこし協力隊は現在 9 名。

地域おこし協力隊にどんな人がいるのか、どんな活動をしているのか、お伝えしていきます。

2025 年度の活動総集編となりますので、ぜひご一読ください。

岡本康太郎 協力隊員

ー協力隊任務「事業承継推進・商工振興推進」ー

私は、安芸高田市の地域おこし協力隊として、「事業承継」をテーマに活動しています。

事業承継とは、お店や会社、仕事を次の人に引き継いでいくことです。

活動を始めて最初に取り組んだのは、

市内の事業者の皆さんが、今どのように考えておられるのかを知ることでした。

2024 年から 2025 年にかけて、市内の事業者約 780 社を対象に、

事業承継に関するアンケートを行いました。

その結果、回答のあった事業者のうち、

- 42%の方が、将来的に事業承継を考えている
- 23%の方は、事情があり今は判断できない
- 33%の方は、今のところ事業承継を考えていない

という状況が分かりました。

中でも多かったのが、

「事業承継は考えているが、何から始めたらよいのかわからない」
という声でした。

そこで現在は、**商工会と連携**しながら、

事業承継を希望している事業者の方を中心に、相談対応や情報提供などの支援を行っています。

いきなり専門家につなぐのではなく、
まずは悩みや状況を整理するところから、一緒に考える支援を心がけています。

また活動を進める中で、

「事業承継」という言葉自体が、市民の皆さんにとって少し難しく、身近に感じにくいものだということも分かってきました。

そこで、市の広報誌に協力をいただき、事業承継について、できるだけ分かりやすく紹介する**コラムの連載**にも取り組んでいます。

専門的な話ではなく、「もし自分だったら」という視点で読んでもらえる内容を意識しています。

さらに、事業承継は「お店や会社」だけの話ではありません。

すでに廃業された事業者の方から、

使われなくなった**資材や機材**を、別の方へ**引き継ぐお手伝い**も行っています。

まだ使えるものが、次の人に活かされることで、

市内でモノや思いが循環していく仕組みにつながればと考えています。

これからやりたいこと

—事業承継が、当たり前**の選択肢になる地域**を目指して—

これまでの活動を通して、

安芸高田市には「引き継ぎたい思い」も「引き継ぐ可能性」も、すでに多くあると感じています。

一方で、それらがうまくつながっていないことが課題だと考えています。

今後は、次のような取り組みを進めていきたいと考えています。

1. 事業承継を知るきっかけづくり

「まだ先の話」「自分には関係ない」と思われがちな事業承継について、
もっと気軽に知ってもらえる機会を増やしたいと考えています。

広報誌での情報発信を続けながら、

分かりやすい説明会や話を聞ける場づくりにも取り組んでいきます。

2. 小さな引き継ぎを大切に**する取り組み**

お店や会社をすべて引き継がなくても、

「道具だけ」「設備だけ」「これまでの経験や思いだけ」など、

小さな引き継ぎも立派な事業承継です。

資材や機材の引き継ぎ支援を続けながら、
市内でモノや価値が無駄にならず、次につながる仕組みを考えていきます。

3. 安心して相談できる体制づくり

商工会や関係機関と連携しながら、
「誰に相談したらいいかわからない」という不安を減らしていきたいと考えています。
事業者の状況に合わせて、段階的に寄り添う支援を目指します。

おわりに

事業承継は、
仕事を引き継ぐだけでなく、**地域の暮らしや歴史を未来につなぐこと**でもあります。

これからも地域に寄り添いながら、
安芸高田市に合った事業承継の形を、
皆さんと一緒に考えていきたいと思います。



金廣愛璃 協力隊員

—協力隊任務「ふるさと納税推進」—

私は2024年10月より、安芸高田市地域おこし協力隊として「ふるさと納税推進」のミッションを担当しています。

ふるさと納税の市場が年々拡大する中で、安芸高田市ならではの特色を打ち出しながら寄付額を伸ばしていくため、中間委託事業者や担当職員の皆さまと日々相談を重ねながら業務に取り組んでいます。

これまでの活動の振り返り

安芸高田市には、ふるさと納税を専門に担当する部署がなく、政策企画課の職員数名で業務を担っています。そのため、事務処理に追われ、既存の返礼品登録事業者との連絡が十分に取れないことや、新規返礼品の開拓が進まないことが課題として挙げられていました。

そこで着任後は、持ち前のフットワークを生かし、自己紹介を兼ねて登録事業者の皆さまを一軒一軒訪問しました。すると、「連絡しようと思っていたが忙しくて後回しになっていた」「新しい商品ができた」「商品が一新したのでサムネイル画像を変更してほしい」など、現場ならではの声を数多く伺うことができました。

また、会話の中から新たな事業者様をご紹介いただくことも多く、ふるさと納税の輪を広げていくきっかけにもなりました。定期的な挨拶や地域行事への参加を重ねることで関係性が深まり、初回訪問では聞けなかった「実は…」というお悩みや想いを打ち明けていただくことも増えていきました。その結果、着任後から55の事業者様への訪問ができ（内7社が新規登録事業者）、さらに22社から新商品のご提案をいただくことができました。

そうした中で多く聞かれたのが、「商品開発や製造、販売で手一杯で、PRまで手が回らない」という声です。そこで、生産者のこだわりや想いを直接伝える場として、YouTube番組「AKITAKATA ふるさとチャンネル」の制作を企画しました。

商品画像だけでは伝えきれない熱意や背景を映像で届けたい——そんな思いから制作を決め、映像編集は未経験の分野でしたが、プロの方にアドバイスをいただきながら、担当課の皆さまと内容を検討し、撮影・ナレーション・編集まで一貫して行っています。数分の動画でも想像以上に時間と労力がかかっていますが、完成した映像を見て事業者様から感謝の言葉をいただけた時、大きなやりがいを感じています。

これからやりたいこと

ふるさと納税は、故郷や応援したい地域に想いを届けることができる制度です。近年は節税対策として利用される方も多いですが、安芸高田市の魅力が伝わる返礼品や、実際に足を運びたくなる体験型返礼品を今後さらに開拓していきたいと考えています。

返礼品をきっかけに安芸高田市のファン、そして事業者のファンが増えるよう、来年度も自分にできることを一つ一つ積み重ねていきます。



「安芸高田市のまちの未来を若者と語る日」シンポジウムにて協力隊員として登壇



サンフレッチェ広島スポンサードゲーム「安芸高田 DAY」にてふるさと納税コーナーをスタジアム内に設置・運営

ホアン グエン 協力隊員

—協力隊任務「安芸高田市のベトナム人コミュニティ構築」—

2023年10月より、安芸高田市地域おこし協力隊として、安芸高田市でベトナム人コミュニティ構築をしているホアングエンです。

26年7月時点の市の人口は約2万5100人。その5%超に当たる1259人が外国籍市民で、多くが技能実習生です。その中の3分の1がベトナム人です。

ベトナム人及び東南アジア技能実習生の各種手続きの手伝い、病院への同行などを担っています。日本語学習支援を企画し、地域の祭りやイベントにも参加しています。その他SNSでベトナム人に向けた生活情報も発信しています。

ベトナム人（及び東南アジア外国人）住民の支援

ベトナム人住民とのコミュニティをつくるため、Facebookで「安芸高田市に住んでいるベトナム人会」を作成し管理しています。これを通してベトナム人実習生の声を聞き、悩み相談や対面相談などを受けています。

そして、市役所の窓口・病院に来られる実習生の通訳・翻訳の対応もしています。

イベント実施（多文化共生・国際交流の推進）

市民の異文化の理解を深めることができるようにベトナム文化の紹介、国際交流イベントの企画を立ち上げて、実施しています。2024年2月10日に安芸高田市で初めて、外国人向けのイベント「ベトナムテト」を開催し、国籍や宗教を問わず、たくさんの人に集ってもらい、国際ステージやベトナムのお節料理を食べながら楽しく交流しました。2025年1月25日第2回ベトナムテトを開催して、約170名が参加し、2026年2月15日第3回ベトナムテトを開催して、約240名が参加しました。

また、市内在住の外国人が日本人と接する機会をよりたくさん増やすため、地元イベントの協力もしています。

日本語学習支援

日本で働き続けていくには、日常生活に必要な日本語学習だけでなく、さらなるレベルアップが必要です。JLPT試験（日本語能力試験）に向けた日本語学習の支援に加えて、個別に実習技能試験・特定技能1号・2号試験に向けた学習の支援もしています。

今後の目標は、外国人実習生たちが日本での仕事を通じて最良の経験を得られるように、もっと多く支援をしていきたいです。そして、地域住民と外国人住民との繋がりづくりをさらに進めていきます。

第40回たかみや大地祭り（出店）



2025年ベトナムテト（旧正月イベント）



安芸高田市多文化共生センターきらり
でボランティア清掃と食事交流会



第2回安芸高田市国際交流サッカー大会



2026年ベトナムテト（旧正月イベント）



第42回たかみや文化祭（出店）



八千代町で日本文化交流会（日本語教室）



日本語検定対策学習支援



椎葉寛 協力隊員

—協力隊任務「神楽門前湯治村の空きテナントを活用して賑わいを起こす」—

着任初年度：地域を知り、人を知る一年

『神楽門前湯治村の空きテナントを活用して賑わいを起こす』というミッションのもと、地域おこし協力隊として着任し、現在2年目の半ばを迎えました。

着任初年度は、施設の特性を深く理解し、**現場で働く方々との信頼関係を築くことを最優先**に活動しました。

湯治村内の各部署の業務を実際に体験することで、日々の運営や課題を現場目線で学び、村内で働く方々との関係性を構築しました。こうした日常的な対話を通じて、運営上の工夫や課題など、**多様な視点を持つことができました**。

— 文化理解 —

各部署での業務体験をきっかけに、湯治村と深く関わる**神楽団の方々ともつながりを持つ**ことができました。

神楽を間近で拝見し、舞や囃子、衣装、物語背景など、資料だけでは伝わらない**神楽の奥深い世界**を体感しました。

この経験から、**地域に根差した生活文化であり、人と人をつなぐ存在であること**を実感し、以降の活動においても文化的背景を尊重する姿勢を大切にしています。

— 二年目の取り組み：地域内経済循環の実証 —

着任2年目からは、これまでに築いた関係性を基盤に、**地域内経済循環の創出と空き施設の有効活用**をテーマとした実証的な取り組みを行いました。

神楽門前湯治村内の「お食事処ふくすけ」を活用し、**地域の特産物を生かしたカフェ営業**を試験的に実施しました。

週替わりで地域の生産者からスイーツを仕入れ、商品背景や作り手の想いを来訪者に直接伝える形式とし、令和7年7月から11月末までに計**15回の営業**を行い、延べ**300人以上の来店者**を迎えました。

— 生産者支援と実績～現在の取り組み —

営業期間中は、**15事業者の取り寄せた商品をすべて完売**し、生産者支援と地域内経済循環の双方につながる販売モデルの有効性を確認しました。また、価格帯や販売数量、来訪者の反応など、実践的な知見を蓄積することができました。

現在は、その知見を生かし、湯治村が主体となってカフェ営業を行うため、**メニュー構成や提供方法、動線整理、告知方法などを伴走的に支援**しています。その結果、令和8年1月下旬から本格的なカフェ運用が始まり、**持続可能な運営体制づくりの基盤を整える**ことができました。

ー 今後に向けて ー

今後は、ふくすけカフェへの直接的なサポートを一区切りとし、湯治村内の別の空き店舗の**有効活用**に向けた取り組みを模索していきます。

また、協力隊としての最終年度を迎えるにあたり、任期終了後を見据え、**地域への定着と生業化**に向けた準備を進めていきます。

今後も、地域の方々との対話を大切にしながら、**安芸高田市ならではの魅力を生かした持続可能なにぎわいづくりに貢献**していきます。



湯治村で行われた「夏祭り」の運営サポート



湯治村の中で使われなくなった食器や道具などを販売する

蚤の市を湯治村スタッフと共同開催



お食事処「ふくすけ」の空き時間を利用してカフェ営業を開始。地域生産者さんの手作りスイーツなどを販売

下林悠治 協力隊員

一協力隊任務「吉田高校の魅力化推進」一

2024 年 10 月着任の「吉田高校魅力化推進」を担当している下林悠治です。私の地域おこし協力隊活動は早くも 2 年目の半ばに差しかかってまいりました。つきましては、この場をお借りし、これまでの自分自身の活動の振り返りを行い、今後の展望を述べさせていただきます。

着任当初の試行錯誤

まず、着任当初の 3 か月は、数々の学校行事を運営していくための補助をさせて頂きながら、「高校の魅力化」とは何かを模索しました。先輩隊員からの助言を参考にしたり、自身の思考を巡らせながら、生徒が「学校生活が楽しい」と感じられていることが「魅力的な高校」の最大の条件ではないかという結論に至りました。同時に、ただ楽しいだけではなく、授業との関連性を意識する厳しさも必要であることを学びました。

吉田高校の特色

吉田高校では、探究科、アグリビジネス科共に探究学習に力を入れています。継続性のある探究教材をいかに楽しく学習し、その学びを今後どのように活かしていくかが大きく問われます。それゆえに、早い段階で魅力化の概念を掴むことができたのは幸いでしたし、「高校魅力化」を進めるために教職員の皆様、吉高生、行政スタッフの方々、そして地域の方々との連携を取るための関係構築に注力できるようになりました。

高校魅力化プロジェクト始動

その結果、「高校魅力化」につながるいくつかのプロジェクトが校内外で始まりました。例えば、写真部、美術部と書道部の生徒たちによる吉高プロモーション用のアニメーション制作や生徒会による大阪万博での神楽部の演出補助、地域との連携活動としては、アグリビジネス科の実験場を使った無農薬紅花栽培や小麦栽培の実践等です。

学校運営への理解深める

探究授業や一般授業、学校行事への参加を通して、多角的な視点で学校運営に関する理解を深めることもできました。中でも多くのゲストの方々にご協力頂き、生徒との対話の中でそれぞれの価値観を共有し合う「探究サロン」や、課題探究を始めるにあたって生徒たちのために催した「地域の人の話を聞く会」では、学校と地域の窓口になるコーディネーター役として深く関わらせて頂くことができました。さらには、多くの教職員の皆様に助けていただき、「英語科」での教育実習をさせて頂いたことで、授業づくりや生徒指導、体育祭などの大きな学校行事への参加を通して教員としての役割も学ぶことができました。

今後の展望

こうした経験が基になり、現在では残りの1年半、「吉田高校魅力化推進」のために自分が何をすべきか、どう動くべきかがはっきりと見えてきました。それは、生徒たちが

- 1) 自分たちが何に興味をもっているのかを知り
- 2) その興味について粘り強く調べ
- 3) 自分の言葉で言語化する

といった過程をお互い楽しみながら深め合い、自信をもって発表できるためのサポートに尽力することです。私は、不安が自信に変わり、闇を明るく照らし、自他ともに楽しく高め合う環境ができれば、本当の意味で「学校が魅力的」になる、ということではないかと考えます。そのための仕掛けづくりは、今後とも自分の管理できる範囲で拡大していきたいと思います。

「吉田高校の魅力化」に紐づいているのは、やはり現実的には「吉田高校存続化」だと思います。学校を存続させていくには一定入学者数の確保が必要です。時間的な制約は重々承知の上、学校管理職の方々とも連携し、この点においても貢献できればと考えております。



寺内宏明 協力隊員

ー協力隊任務「生桑地区の地域振興チャレンジ」ー

地域を知り、覚えてもらう

地域おこし協力隊として美土里町生桑地区で活動をしている寺内宏明です。今となっては生桑地区唯一の商店となった「ふれあい市」でお世話になり、お手伝いをさせていただくことを通じて、地域の人・場所・建物・歴史をたくさん知り、また地域住民の方々と交流させていただく中で顔を覚えてもらってきました。

初めから意識していたことではないのですが、どのような活動をするにも、まずは「地域に受け入れてもらっている」という土壌がないと難しいと感じるようになりました。

その土壌を作るといった意味で、この1年と4ヶ月の間ふれあい市でやらせていただいていたことは、とても有意義だったように感じます。

活動を行う中で、ふれあい市関係者の方々はもちろん、生桑地区住民の方にも本当に良くしてもらい、私としても非常に愛着のある場所になりました。

ー竹炭を活用した商品を作るー

今ふれあい市は広島県に協力していただいて、森林保全の意味合いで竹林伐採に取り組んでいます。そこで出てくる竹を、産業廃棄物にするのではなく価値ある商品にしたいと考え、竹炭商品を開発中です。

去年末、竹炭の土壌改良効果を利用した竹炭米が完成しましたので、今後は販売方法などを模索していくことになります。

竹炭米以外にも竹炭商品を作り、地域の特産の1つにしていきたいと考えています。

ー地域のデジタル化に貢献するー

現代の社会はいたるところでデジタル化していて、ある程度のデジタルスキルがあることを前提とした社会になっていっています。しかし高齢者は置いてけぼりになっていて、高齢化の進んだ地域では、その傾向が顕著となっています。

生桑地区は、安芸高田市の中でも特に高齢化が進んでいる地域で、生田は53.1%、桑田は53.3%と非常に高い高齢化率になって、PCやスマートフォンを活用できている方は多くはないでしょう。

その問題を少しでも解消するため、ふれあい市でスマホ教室の開催を計画しています。これからは1人でも多くの方のデジタル学習に協力していきたいと考えています。

中川優実 協力隊員

—協力隊任務「里山循環型社会の実現に向けたフィールドでの実践～起業～」—

2025 年 10 月より着任しました中川優実です。

”里山循環型社会”とはなんだろう。ひとことで聞いても分かるようなわからないような、はっきりとした全貌はすぐには見えず、まずは安芸高田市とはどういった土地なのか、どんな方々がいて、どんな暮らしをしてきたのだろうか、といったことを手探りで自分の中でのこたえを模索し、はや4ヶ月目となりました。

これまでの活動

協力隊のOB/OGを含めた地域で活動されている様々な方を訪問し、時には地域のイベントに参加するなど、関係構築・地域理解に努めました。とくに10、11月には秋祭りをしている地域も多く、祭りの手伝いを通じて安芸高田市の特徴である神楽を見る機会も数多くありました。都市では地域コミュニティがだんだんと薄れ、祭りの機会も減ってきている中、地域の方々が協力しながら祭りを存続させていることを目の当たりにし感銘を受けました。また、田んぼや畑をしている方も数多くいることも相まって、収穫したもち米でもちをつき、祭りでもちまきをするといった一連の流れが、楽しむだけのお祭りではなく日本の昔ながらの文化が色濃く残る地域であると、私にはより感じられました。

さらに地域住民さんや事業者さんを訪れる中でもう一つ魅力を感じたことは、生活に季節の移ろいを感じられたことです。運よく私が着任した時期は秋。たくさんの山の恵み・自然の恵みをおすそ分けいただき、果物などの収穫を体験させていただき、私にとっては目が輝くような経験でした。「その分やることがたくさんあつてきりが無いのよ」と言っていた地域住民の方の笑顔が、何気ない生活への充実感を物語っていたように見え、とても印象に残っています。

また、森の整備や間伐材の活用、木々の保護活動などに参加したこと、またそれに関わる有識者のお話などから、自然の摂理や人間の生活との関わりを学び、人間にとっての便利さと自然にとっての快適さの両立について考えるきっかけになりました。

このように自然と人々の生活が近いことが里山ならではの生活であり、当たり前ではありますが千差万別ある自然に基づく生活こそが、この土地の特徴であると改めて感じております。

これからの活動

この4ヶ月を通して見えてきた里山の暮らしがどのように循環し、さらに“社会”に紐づけられるかといった部分がこれからの課題となっております。とくに里山の暮らしは今日から

すぐに始められるものではなく、かけた年月と生活が相まって成り立つものであると感じました。

これまでの海外や県外での暮らしぶりや、自分の概念が生きる部分と、安芸高田市での生活の双方の良いところを生かし、引き続き地域住民の方々や地域事業者の方々に教えを請いながら、ゆくゆくは拠点を構え地域に根付いていきたいと思っております。

長門和美 協力隊員

ー協力隊任務「伝統と耕作放棄地、地域植物の活用」ー

蘇る紅花の風景を夢見て

紅花プロジェクト

2025 年春に着任しました、長門和美です。わたしはお化粧を施すことを一時期仕事にしていた経緯から、紅花の口紅を手作りすることを夢見て、最初は廿日市市の実家の休耕田にて紅花栽培を行い、花弁を収穫して色素を抽出し、紅花の口紅を作るまでを研究して来ましたが、当時の仲間内（少人数）での活動には限界を感じていました。

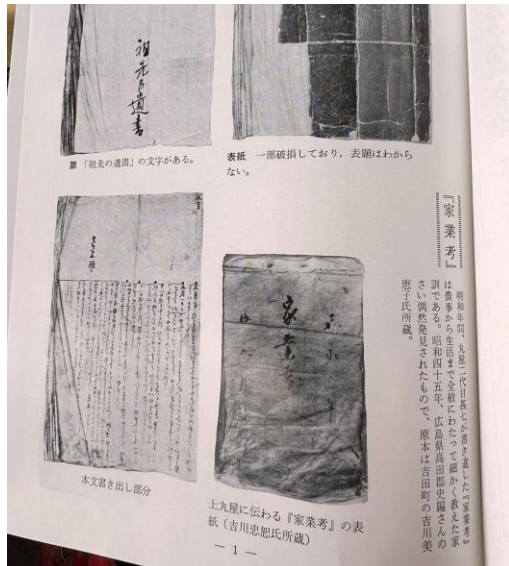
そこで、広大な土地があり農業が盛んな安芸高田市で地域の方々と共に紅花で地域おこしが出来ないかと思い、2025 年春、地域おこし協力隊のフリーミッション枠で応募しました。

後から知ったのですが、奇跡的なタイミングで安芸高田市の吉田町にある印内集落を拠点にした紅花プロジェクトが立ち上がっており、運命的な引き合わせとなりました。

発起人は印内にお住まいで自然農をされている、畝崎さん。発端は、吉田町多治比の吉川さん宅から発見された「家業考」という書物。明治から昭和にかけて農業から生活まで全般にわたる家訓を丸屋二代目甚七さんが書き残したというもの。その中に、かつてこの地域一帯で紅花栽培が行われていたという記述が残っていたのが切っ掛けで、安芸高田市での紅花栽培の復活を掲げ、今では総勢約 20 名ほどで活動しています。

後ほど畝崎さんの調査によりわかったことですが、甲田町に至っては「紅原」という古い地名もある様で、確かに紅花の風景がかつてこの一帯にあったことが伺えます。

「家業考」が発見された吉川さんの家がある吉田町の多治比と、甲田の紅原、に挟まれるようにして真ん中に位置する印内集落からはじまった、紅花プロジェクト。風越山を囲むようにして紅花畑が広がり、安芸高田市の風物詩になることを夢見て、日々皆さんと語り合っています。



活動の振り返り

2025 年は、種まきから始まりました。印内の岡崎さんの休耕田を実験農園としてご提供いただき、皆で春に種をまき、間引きをして、支柱を立て、7月初旬には無事に花を咲かせました。

丁度、総務省の方々が安芸高田市の地域おこし協力隊の視察に来られるタイミングと紅花の開花時期が丁度重なったことから、印内の紅花畑の方へも足を運んでいただき、初めて開花した紅花を視察していただくことが叶いました。その際には畝崎さんと岡崎さんにも同席していただき、大変有意義な活動報告が出来ました。

紅花で有名な山形県に視察で出張も行かせてもらい、現地の紅花に携わる方々にお話を伺えたことは大きな収穫となり、今後の活動の指針にも大きく影響を受けました。現地でお世話になった生産者さんに安芸高田市の紅花畑まで足を運んでいただける日を夢見て頑張ろう、と思えました。



これからの展望

誕生のお祝いから、七五三、成人式、結婚式、という人生の通過儀礼としての大切な場面に寄り添い、そしてまた次の命へと代々受け継がれて行くような、“紅”を安芸高田市で作り、命のお祝いをしていきたい。伝統行事である花田植えのときには早乙女さんの口元に点してもらうことも一つの夢です。他にも紅花染めをしたり、種から油を採ったり、花卉は漢方にもなるということで食品加工なども出来たら、と夢は広がります。

又、この土地に自生する植物（ミツマタ、竹など）とも掛け合わせたもの作りにも挑戦したいと思っています。

今後も地道に堅実に、地域の皆さんと共に活動していきたいと思っています。共感頂ける方は是非お気軽にお問い合わせください。共に安芸高田市の紅花プロジェクトを盛り上げていただけたら幸いです。



松川拓馬 協力隊員

ー協力隊任務「向原高校の魅力化推進」ー

「この学校に来てよかった」を、一つでも増やす

地域おこし協力隊になってから、1年と半年が経過しようとしています。

これまでの僕の取り組みは、「県立向原高校の魅力化推進」というミッションのもと、生徒の学びと学校生活の中に日常的に入り込み、探究・学習・広報という役割を横断しながら関わっています。

探究の場では外部との調整や校内の動きの整理、そして、授業内での生徒支援。

授業では、大学のティーチングアシスタントのように生徒のつまづきをサポートしたり、放課後では、放課後無料塾で授業を担当し、一人ひとりの学びを支えることを行なっています。

広報では地域の特性なども考慮して、SNS（主にInstagram）や学校だよりなど複数の媒体を通して、学校の日常や学習の過程を切り取り、僕のできる範囲での社会に開かれた学校を実現しています。

ー生徒にまっすぐ向き合う時間を増やすー

小規模校といえども、学校運営・校務分掌の内容自体は教員数の多い大規模校と大差ありません。各教科で常勤教員が1名という状況の中、普段の授業と授業準備と並行しながら、大規模校と同様の内容をこなしていくことは非常に難儀で、優先順位の高いものからやらざるえをえない状況です。そこに加えて、相談、受験・就職の個別指導などの生徒対応などを行なっていました。

そんな状況では、生徒が最も信頼をおきたい、評価をしてもらいたい大人に頼りきれない状況になっていると感じました。そこで、生徒が「この学校に来て良かった」を感じるために、先生たちの業務がよりスムーズになったり、軽くなったりして、ゆとりが持てるようになって欲しい。そして、先生も「この学校で働いて良かった」と感じて欲しいという思いを持って関わっています。

これから

高校魅力化は学校に新しい制度を作れば良いというものではなく、学校は主役が生徒、それを支えるのが教員や地域の大人と言う構成で、高校魅力化のためには学校に関わる人全てが学校に対して愛を持ち、行動をする必要があると思っています。

これまで探究・学習・広報を中心に行なってきたものは継続しながら、まずは、先生方と生徒が「この学校で良かった」を増やしていけたらなと思います。